

赤西・音水国有林(兵庫県宍粟郡)の甲虫相 (1)*

高橋 寿郎

まえがき

赤西・音水渓谷は夫々赤西・音水原始林として植物関係ではその豊富な植相が紹介されており採集・調査に出掛けられる方々も少なくない。この原始林は大阪営林局の管轄山林中大切な林区であろう。その豊富な林相として知られていると共に最近はその伐採が新聞紙上にもとりあげられて注目的にもなっている。

現在“氷ノ山・那岐山・後山国定公園”の一部として僅かながら伐採をまぬがれて赤西・音水渓谷が残っている(尤も昔日のような姿ではなく、というのは筆者が始めて同地を訪れた1958年の頃からしても相当伐採が手荒く実施されており、車で相当入り込めるので日々その姿を変えつつあることは残念である)。

この地区の甲虫相に就いては可成りの採集者が訪問していると考えられるにもかかわらずほとんどまとまった報文が世に出ていない(カミキリムシについて1972年、黒田裕一、畑中熙二氏による立派な報文が夫々ある)。

筆者は兵庫県の甲虫相完成を目的としてここ30数年間調査を継続してきている。

神戸市を中心とした六甲山系は交通の便も良いためそのファウナはほぼわかっており、大阪府と境を接する川西市、猪名川町付近は仲田元亮氏のまとめた報文(1972)、多紀郡は部分的ではあるが、兵庫農大の方々の調査があり、氷上郡、出石郡は山本義丸、高橋匡両氏を中心とした調査でほとんどその全貌はわかっており、扇ノ山、氷ノ山も兵庫農大・柏原高校並びに兵庫昆虫同好会メンバーの方々の調査でほぼ概略はまとまっていると考えられる(扇ノ山については1972年辻啓介・岸田剛二氏の報文、氷ノ山については1966年筆者による報文がある)。そうなると思下での未調査地としては大きくいって県中央部、朝来郡、宍粟郡が割合わかっていない地点として残る(揖保郡には古い大上宇一氏の報告、西脇付近は西脇昆虫同好会の調査、淡路島については1973年愛媛大学農学部調査報告がある)。部分的に生野、段ヶ峯、笠形山、雪彦山、三濃山と機会あるごとに調査をしており、或る程度のファウナもわかってきつつある。

ここで宍粟郡下で最も興味ある地域での一つである赤西・音水渓谷・国有林の甲虫相の概略でもよいからまと

めたく考えた次第である(宍粟郡下の坂ノ谷国有林も調査しているが、地域的には氷ノ山に属する所と考えられるのでここでは省いた)。

音水国有林については過去3回(13—Ⅷ—1958, 21—Ⅷ—1959, 20—Ⅷ—1969)の調査をしたが何分交通不便で時間的制約もあり充分でなかった。たまたま1970年になって愚息の車を利用出来ることになったので再び計画を5～9月の間各月最低1度の調査と立案同年5月からスタートしたが、その年の6月思いもかけず開腹手術という大病にかかりその年は2回で終り(10—Ⅴ—1970, 31—Ⅴ—1970)、その後の療養生活を経て再び1972年に取り組んだ。結果的には1972年6回1973年4回の調査を実行出来た(4—Ⅵ—1972, 21—Ⅴ—1972, 11—Ⅵ—1972, 25—Ⅵ—1972, 16—Ⅶ—1972, 30—Ⅶ—1972, 13—Ⅴ—1973, 3—Ⅵ—1973, 24—Ⅵ—1973, 15—Ⅷ—1973)。ただ残念ながら種々の事情で当初の計画からすれば8～9月での調査がまったく出来ていない。しかし充分とはいえないまでもほぼその大要はつかみ得たのではないかと考えている。訪問の都度破壊されている現状からこの辺でその概要をまとめておかなければ全く変わってしまう恐れもあるのでここに発表させて頂く次第である。

本報文は出来るだけ他の方々の記録もとり入れさせて頂いた。

標本の同定については岸井尚・久松定成・宮武睦夫・野村鎮・大平仁夫・沢田高平(A・B・C順)の各先生に御願したものが多くある。御多忙中同定を御引受け下さった上記諸先生方に厚く御礼申し上げる。また筆者自身の同定については出来るだけ正確を期したが誤りがあるかも知れずこれ等の点に就いて御叱正御教示を得れば幸である。

最後に1970年以降の採集調査にあたって上記愚息の自動車による採集であり、現地での採集はその都度愚妻も手伝ってくれた。これらの援助がなければこれ程の成果が上らなかつたと思われる。記して感謝致したい。

甲虫相概観

この地区産全甲虫類のリストを掲げて説明すればよいのであるが、余り長くなるので科別に産する種類と注目すべき点についてのみ説明しておく。学名も和名ある種

*兵庫県甲虫相資料, 44.

に就いては省略してある。

1. ハンミョウ科 (Cicindelidae) : 1種(0)

(括弧内の数字は兵庫県産のこの科の種類数, これは筆者がまとめた兵庫県産甲虫目録, 1973未刊による)。この科のものは1種しか記録出来ていない。扇ノ山あたりからは珍しいものが記録されており, 県下産の数からしてもっともよいと考えられる。

2. オサムシ科 (Carabidae) : 18種(244)。

この科は全く調査不十分のグループである。若干の種が同定依頼に出してあるので増加すると考えられるが, それでも県下産に比して余りにも少ない。扇ノ山とか隣接の船越山あたりに北方系の珍しい種がいることが知られているのでゆっくり調査すればまだまだ増加すると考えられる。したがって現時点で特にこの仲間を説明する種もなく記録種はほとんど普通にいる種である。

3. ゲンゴロウ科 (Dytiscidae) : 1種(34)。

音水溪谷といい引原川が美しく流れているのであるが, お恥しいが水棲甲虫の調査は全くやっていない。

4. ガムシ科 (Hydrophilidae) : 1種(31)。

5. エンムシ科 (Histeridae) : 1種(25)。

ともにもっと分布しているように思われる。

6. シデムシ科 (Sliphidae) : 3種(17)。

ヒロオビシデムシ, ヒメクロシデムシは共に県下でこの地のみ知られている種で特に後者は本州高地帯に産する種である。

7. デオキノコムシ科 (Scaphidiidae) : 7種(21)。

扇ノ山, 氷ノ山に共通して分布しているものが多い。アカマデオキノコムシだけはこの地のみ知られてゐる。

8. ハネカクシ科 (Staphylinidae) : 18種(191)。

兵庫県産からすれば大変少ない。まだまだいると考えられる。ただこの地にのみ記録種として *Oxytelus*, sp. *Stenus* (*Hypostenus*) *verox*, *Megalinus* *punctiventris*, *Himekinocohane* *staphylin*, *Tsuyagrosira* *hane* *staphylin*, *Cata* *acamar* *staphylin* の6種がある(この科のものは全部沢田高平先生の同定による)。

9. クワガタムシ科 (Lucanidae) : 5種(15)。

この地区特産種というのではない。ルリクワガタは扇ノ山, 氷ノ山と共に県下ではこの地方にのみ産する珍品である, ただコルリクワガタはまだ発見されていない(扇ノ山, 氷ノ山にはいる)。扇ノ山, 氷ノ山にいる種のオニクワガタ, オオクワガタ, ヒメオオクワガタ, マダラクワガタの珍品もまだこの地では得られていない。

10. コガネムシ科 (Scarabaeidae) : 32種(142)。

牛馬がほとんどいないので糞虫類が比較的少ない。マツタチャイロコガネ, ヤマウチチャイロコガネの2種は県下でこの地に産するのみである。オオトラフコガネ

は扇ノ山, 氷ノ山とこの地に割合多くいる種である。トラハナムグリも県下では珍しい種である。トゲヒラタハナムグリ, オオヒラタハナムグリは共に少ない。特に後者が少ない。トゲヒラタハナムグリのみで黒色の上翅に白色鱗片で模様をつくるのが多くいる。またヒラタハナムグリのみで黒色の多いことも山が深いからかも知れない。

11. マルハナムシ科 (Helodidae) : 1種(4)。

12. マルトゲムシ科 (Byrrhidae) : 1種(12)。

Cephalobyrrhus japonicus (久松先生同定)はこの地から知られているだけである。

13. ナガハナムシ科 (Ptilodactylidae) : 4種(13)。

オオクリイロヒゲナガハナムシは県下でこの地区だけにいる。

14. ドロムシ科 (Dryopidae) : 1種(1)。

15. タマムシ科 (Buprestidae) : 36種(65)。

県下でこの地区からのみ知られている種が次のごとく11種を数える, 即ち, アオタマムシ, ダイミョウナガタマムシ, ムネアカナガタマムシ, ミドリツヤナガタマムシ, ロニノナガタマムシ, ベニナガタマムシ, アオグロナガタマムシ, ヴォダクナガタマムシ, コクロナガタマムシ, ススビトハギチビタマムシ, ハイイロヒラタチビタマムシ。比較的大形のタマムシが少いようである。氷ノ山, 扇ノ山に分布しているミヤマナカボソタマムシはまだこの地で得られていない。県下氷上郡からのみ記録のあったヤスマツケシタマムシをこの地で得ている。

16. コメツキムシ科 (Elateridae) : 29種(89)。

この地区からのみ知られている種が次の8種ある。ニホンチビマメコメツキ, クロツヤヒラタコメツキ, アカアシクロコメツキ, マルクビクシコメツキ, チャバネクシコメツキ, ホソナカグロコメツキ, クチボソコメツキ(この科はその全部の標本を岸井尚, 大平仁夫両先生に同定して頂いた)。

17. コメツキダマシ科 (Eucnemidae) : 1種(14)。

18. ホソホタルモドキ科 (Omethidae) : 1種(2)。

19. ホタル科 (Lampyridae) : 6種(10)。

20. ジョウカイボン科 (Cantharidae) : 18種(28)。

コクロヒメジョウカイはこの地からしか知られていない。

21. ベニボタル科 (Lycostomus) : 16種(31)。

県下で全く知られていなかったキタベニボタルがこの地にいる。本種は恐らくここが西限であろう。さらにアカミスジヒシベニボタルもこの地で知られている種である。一般にベニボタル類はこの地では多いようである(この仲間には就いては辻啓介氏の御教示になるものが多い。記して御礼申上げる)。

22. カツオブシムシ科 (Dermestidae) : 3種(13)。

23. シバンムシ科 (Anobiidae) : 2種(8)。

クシヒゲシバンムシは県下でここからのみ知られている。

24. ナガシクイムシ科 (Bostrychidae) : 1種(8)。

25. コクヌスト科 (Trogositidae) : 2種(4)。

セダカコクヌストは今の所ここからのみ知られている。

26. カッコウムシ科 (Cleridae) : 3種(14)。

ムナグロナガカッコウムシは県下の他の地では知られていない。キオビナガカッコウムシは多くいる。

27. ジョウカイモドキ科 (Melyridae) : 1種(6)。

28. ケシキスイムシ科 (Nitidulidae) : 20種(61)。

かなり注意して調査したのであるが、まだ不充分のようである。県下でこの地からのみ知られている種が次の9種ある。コクロチビハナノケシキスイ、ハバビロヒラタケシキスイ、ウスモンアカヒラタケシキスイ、キイロヒラタケシキスイ、ドウイロムクゲケシキスイ、マエアカムクゲケシキスイ、Aethina aeneipennis、ネアカマルケシキスイ、ヒラムネマルキスイ (この科のものは久松定成先生の同定になるものが多くある)。

29. ヒラタムシ科 (Cucujidae) : 1種(7)。

ヒメヒラタムシは今の所ここからのみ知られているのであるが、調査が不十分な仲間である。

30. ホソヒラタムシ科 (Silvanidae) : 2種(7)。

31. キスイムシ科 (Cryptophagidae) : 6種(12)。

ヒラムネマルキスイ、クロノコムネキスイ、クリイロナガマルキスイの3種ならびに Serratomaria 属の1種 (久松先生同定) がこの地からのみ知られている種である。

32. ムクゲキスイムシ科 (Biphyllidae) : 1種(2)。

33. キスイモドキ科 (Byturidae) : 2種(4)。

34. コメツキモドキ科 (Languriidae) : 2種(8)。

ナラコメツキモドキは今の所県下で他に産地を知らない。

35. オオキノコムシ科 (Erotylidae) : 6種(27)。

セグロチビオオキノコムシ、ツマグロチビオオキノコムシの2種はこの地からのみ知られている種である。

36. ヒメハナムシ科 (Phalacridae) : 4種(10)。

ホソヒゲヒメハナムシ、ベニモンアシナガヒメハナムシの2種並びに Stilbus 属1種の計3種は県下にこの地からのみ産として知られているが、ベニモンアシナガヒメハナムシは大変多く産する。

37. ミジンムシ科 (Corylophidae) : 2種(3)。

マエキミジンムシは多く産するが県下で他の地からまだ知られていない。

38. テントウムシ科 (Coccinellidae) : 27種(62)。

ムクゲチビテントウ、オオサカヒメテントウ、トビイロヒメテントウの3種はこの地からのみ知られている種である。シロジュウニホシテントウの大変多いことは注目してよい。ニジュウヤホシテントウは扇ノ山での記録はあるが (この記録は一寸疑わしい) この地では今の所まだ得ていない。

39. テントウダマシ科 (Endomychidae) : 4種(15)。

クロモンケブカテントウダマシはこの地からのみ知られている。

40. ミジンムシダマシ科 (Discolomidae) : 2種(2)。

コゲチャミジンムシダマシはここで知られているのみである。 (25-VI-1974) (以下次号)

(以下P. 38から)

このように欧米人による日本の昆虫研究が日本昆虫学の研究の基となってきたと同時に兵庫県産昆虫類の研究もこれら欧米人によってすすめられてきた。明治10年

(1877) 東京大学が発足するに及び生物学科として動物学が発効、それにともなって昆虫の研究も出効した。

(21-III-1974)